

学習形態 Zoom での講義

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ (14)

前回の流れで、今回は『弁正論』を読むことになりました。前回のリモートで申し上げたんですけど、私これを読めないんですね。にも拘わらず、草稿本では対話形式に細切れに記載されているんですね。その丁寧さに宗祖の気持ちが出ていないか、ということで、何とか食いついてみたいということになりました。

さて、まず『弁正論』とは何か、調べておきたいと思います。この『弁証論八巻』は法琳の著書であるが、実はこれが書かれるまでには、その当時の人達の出来事が浮かび出されます。それを押さえておきましょう。

法琳は、幼くして出家し、広く儒釋百家の学を研ぎ、特に三論に通じた人だったそうです。また長安に行き道術を習い、その思想を探るべく道服を着し、道館に住して道士らにも尊敬されることとなる、と示されています。その後再び釋門に帰して長安の濟法寺に住すといわれております。

その4年後太史令傅奕が、寺や僧尼を減らして、国を盛んにする第十一条を奏進し、帝詔して諸沙門に問うと、直ちに法琳は上書してその非を弁じ、總持寺の普應は『破邪論二巻』を書き釋道二教の対立が激しくなり、道教側の李仲卿は『十異九迷論』を、劉進喜は『顕正論』を顕わし、盛んに仏教を譏諷している。

それに対して、法琳は『弁証論八巻』を顕わしその邪鋒を砕いた、とされている。それによって、道士の秦世英によって、『弁証論』は皇宗を訓諤するものとし、帝は逆鱗して僧尼を沙汰し、法琳に極刑を命じたが、法琳は帝に対し「弁証論が一句でも書史と違えば刑に従います。もしそうでなければ、無辜を濫刑するものであります。」と言い、全く動じなかった。帝は遂にその死を許し、僧寺に移された。その後痲疾を發し遂に寂す。年六十九歳であった。(以上、望月『仏教大辞典』より要約)ということらしいです。

ともかく、読みにくい書なので、他の先生方の論文をちょっと別ファイルでして添付しておきますので照らし合わせながら、一緒に汗を流しましょう。

① 井上円先生の論文 PDF ② 林智康先生の論文 PDF

林先生の論文には

「『六要紗』第六に「およそこの論文、一一の文義、輒く解すべからず」と、存覚はこの『弁正論』の文の意味は理解することが難しいと述べている。」

と示されており、確かに『教行信証』所引の『弁正論』には誤字・脱字が多く引用の意味も理解しがたく、他の諸文の引用とはかなり趣が異っている。とも述べています。

しかるに、林先生は、諸説を引用しながら、ここに一つ結ばれているので、そこの内容を引用しておきます。

重見一行氏は『教行信証の研究』において、『月藏経』忍辱品後半部分「又言両時復有一切天龍乃至……」から『首楞嚴経』等の『諸経論』や『弁正論』の引文は、親鸞六三歳頃より以前の坂東本染筆時、すなわち前期筆跡である。

と、『弁正論』の引文も親鸞六十三歳頃より前の坂東本染筆時、前期筆跡であると述べている。また藤場俊基氏は、『顕浄土方便化身土文類の研究1『弁正論』1』において、赤松俊秀氏の「教行信証の成立と改訂について」(『親

鸞聖人真蹟国宝頭浄土真実教行証文類影印本解説』所収、東本願寺刊)や重見一行氏の『教行信証の研究』、等の書誌学的研究をふまえて、

したがって、坂東本執筆当初の形では『弁正論』は第二分冊(化土巻の末巻)の大半を占める中核的な引文であったわけで、第二の教誡(「外教邪偽の異執を教誡せば」)の主題は主に『弁正論』に託されていたといえる。そして、『大集経』はその補遺として後から加えられたという観点から見ることによって、さらにその主題を明確に読み取ることができるであろう。(括弧内の文は筆者)

と述べている。このことから前記の老毫説や別筆説は成立しないと思われる。

と、述べられています。ということは、(末巻)文頭の「外教邪偽の異執を教誡」する姿として、『弁正論』の「外の異」と「内の喩」の対論と開士の教誡という形でぴったりくるようにも見えます。そしてそのあとに『大集経』等の諸経典も引用されてきた、と見られています。

そう致しますと、その根拠は何か、と言えば、「もろもろの修多羅に抛る」と述べられています。そして「真偽を勘決」とは「外の異」と「内の喩」の対論ということなのでしょう。そういう風に見て『弁正論』を読んでみますと、読みやすくなってまいります。

とは言うものの、私の力量では、読みこなせませんので、手持ちの『講解 教行信証』(星野元豊 著)の「化身土巻末」を参考にして読んでいきたいと思えます。皆さんも手持ちの書籍を参考に読んでみてください。

(1) それでは、『弁正論』に入ってみましょう。

まず『弁正論』巻六の「十喩篇第五」と「九箴篇第六」が引かれている。

「十喩九箴篇」は「十喩篇」と「九箴篇」であり、李道士(=李仲卿)が著わした『十異九迷論』は十力条の老子と釈尊の優劣と九力条の仏教の迷失を挙げて、仏教を批判したものである。(李道士は『十異九迷』という論を作って仏教を批判しているが、この「九述」は原本では「九迷」であり、誤写である、と言われている。)

それに対し法琳は「十喩」と「九箴」で反論している。(「喩」はさとすこと、「箴」は石針のことで、正しい論理が腫れものを刺すごとく、相手の隔点を突く意味である。)

まず、「外の一異」と「内の一喩」ですね。ここは釈迦と老子の出生の違いを、しかも右から生まれたか、左から生まれたか、論じて優劣を競っている。そして、そのあと開士によって決着を示しているわけですね。p 389「すでに正説にあらず。もっとも仮の謬談なり」と言い切っています。右でも左でもどっちでもいいような気がします、それにこだわるのが「異執」ということでしょうか。

次は、「外の一異」と「内の一喩」ですね。ここは地位、身分を比較しています。ここでは開士は出てきません。そして、次の、「外の一異」と「内の一喩」ですが、ここでは老子と釈迦の年代が出てきます。ここで開士は、『史記』には孔子が老子に会って礼の教えを尋ねた、と書いてある、しかし、文王(周の国王)の師匠というのはおかしいではないか、老子はもっと後の人だ」というわけですね。

歴史的にも、老子の存在はよくわからないみたいであります。ただ孔子と同時代のものであることは言われていることである。

次に「外の一異」と「内の一喩」そして開士の言葉が出てきます。ここは生死の問題ですね。ここに「遁天の形」と出てきますが、これは、人を悲しまさせないために流沙(西域の砂漠の地)に行つて姿を隠す仙人の姿を言っていますが、老子はそうではなかった、と言っているわけですね。老子であろうと釈迦であろうと、人間は死を免れることはない、と述べています。

最後に「外の一異」に対して「内の一喩」が答えている、という場面ですね。ここでは「左右でどちらが勝劣なのか」という問題について、つらつらと述べているところです。

課題 58 中華思想をもって、仏教を優位とする「内の一十喩」を親鸞はどう見たのであろうか。

ここの部分は、「釈迦が右脇から生まれ、老子は左脇から生まれた。」という第一の議論からの延長でしょうか。左右勝劣の問題が、ここにきてまた出てきているんですね。左右優劣がそんなに重要な問題だったのだろうか、というのが私の疑問です。

これを親鸞はどのような眼でご覧になったのか、ということが気になっております。そういう左右優劣の風習はもうすでに日本にも入ってきていますね。親鸞にとって無関心ではなかったはずですよ。

さて、内容に入りますと、「左衽はすなわちジュテキの尊ぶところ、右命は中華の尚むところとす。」とあります。実に中華が中心の思想に基づいて成り立っていることを仏教側も言っているわけです。中華が優でその他の国は劣だという見方も問題ですが、仏教が他教をもって証明しようとしていることに対する問題性を、親鸞は感じておられたのではないかと私は思います。〔課題〕

その辺に、外教邪偽の異執という問題性を感じられていたのではないかと、思われます。

次はいわゆる「誕生偈」ですね。これを引用された意図は何なのか、ちょっと読み切れません。

次に行きます。ここで「外論」の方が言うわけですが、道教の「考」と「忠」の教えは国や家を治めるのである、それに対して、仏教は「義を棄て親を棄て、・・・闍王、父を殺せる・・・調達、兄を射て、罪を得るを聞くこと無し。これをもって凡を導く、・・・何ぞ善を生ぜんや」と述べています。ここで原文を読み替えているところがあります。(p 392-2)「無聞得罪」とありますが原文では「無聞得罪」となっているようです。ですから、「外論」は上のように読んでいます。〔課題〕

それに対して親鸞は「聖典」のように読んだわけです。ここはどうも作為的としか思えません。これは(p 251-下4)「信巻」の「難治の三機」と無関係ではないし、この前に「九十五種みな世を汚す」の文があることから察しがつくであります。

次に仏教側からの反論です。「内諭に曰く」から始まります。ここでは「孝」や「忠」は、いわば品のない人たちのために説いているのだ、と。「仏経」には「沙門は世俗を捨てて真実の世界に趣くのである」と述べています。次に「二皇」が出てきます。これは中国の古い伝説上の二皇帝。人首蛇身だそうです。言うなれば鬼神の部類でしょうか。

ここの『須弥四域経』と『空寂所問経』(ともに偽経であるが)には仏教の登場人物が、みな中国の人物に置き換えています。それで結局のところ p 393-5 (これに因って談ずるに、殷・周の世は) 仏教が広まるにふさわしい時代ではなかった、それは仏教の罪ではなく、見えない者たちの罪である、と述べられています。

次は、仏教の像塔を建造するときの話です。「漢明(後漢の明帝)以来、斉・梁までの約500年間、国王から比丘・比丘尼にいたるまで、密かに仏を感じ神々しい光を見たという者たちが二百人ほどいた。」そのほかいろいろ出来事がある、漢の明帝が、洛陽の雍門(西門)の外に白馬寺を建てたことを示している、とされています。だから、いろんな奇瑞な出来事を、自分が経験していないから(無目)と言って、嫌うことがないように、と述べているのであります。

次に「しかるに」からは仏教の説明が続いていってまします。これは結局、最後の二行(p 394-下5)の文に尽きるということでしょう。つまり仏教が中国に伝わって150年後に、老子が「道德五千文」を説いた、そのころ周王朝や老子などは仏教の教えを見ていただろう、そういう証跡がしばしば見受けられる、と言っています。

次は『正法念経』ですが、簡単に申し上げますと、「人々が戒を持たないならば、いろんな災いがおこってくる。また人々が戒を持てば、良い境遇になってくる。」と述べているわけでしょう。これを私たちはどう見ればいいのか、親鸞聖人は何を考えてこの一文を引用されたのか、ここも注目すべきところではないかと思えます。ここの部分などはもはや「崇り思想」でしょう。〔課題〕

次の「君子曰く」の文は、上の文に対してでしょうね、「老子の住んでいるところは、三十二天、三界の外の災いのない楽しみに満ちたところである」と書いてあります。

そして「道士の上げる所の経の目」これは『道経目録』のこと。これには「千二百二十八卷ある」と書か

れているが、今道士の目録には二千四十巻もあって、その中には『漢書芸文志』から引用した八百八十四巻も入れて「道の経論」としている。(乃至)「陶朱という人についてみると、この人は范蠡という人である。この人は呉に囚われ屈辱を受け、その子は斉に殺される。『変化経』を著した陶朱ならば、妖術を使って免れているはずだ、」と述べているわけです。

『造立天地記』には「老子は幽王の子と書いてあるが、実際は幽王の臣下であった、」と述べている。また『化胡経』を見ると老子は漢の時代には東方朔であった。それならば神符を与えて、父の君王を死なないようにさせることができなかつたのか、また、『道経目録』も正本はないのでこれもすでに大いなる誤りではないか、したがって、『玄都録』は偽の中の偽といわねばならない、と述べられている。

それに対して、『大経』(涅槃経)を引用して朕(この文は梁の武皇帝)は外道を捨てて如来の教えに瘡えるべきである、老子・周公・孔子などの聖人も如来の弟子と言われていても、単なる世間の善であり根本的には邪と言わざるを得ないのである、『成実論』にも「清信の仏弟子」と言われているではないか、と述べているが、私にはなかなか読むことができないでいます。

また、『坂東本』ではその後のページの半分が切られている跡があります。引用してまずいことがあって切り取ったのでしょうか。

これ以上私の力が及ばないので、参考までに、星野元豊先生の『講解教行信証』の一節を読んでみてください。これも別ファイルで添付しておきます。

星野元豊 PDF

末文 ともかく、ここの『弁正論』だけは異質であり、それまで述べられてきた親鸞の論理では考えられないほどの稚拙な(?)論理が、果たして親鸞が引用されたとしたならば、その意図は何だったのか、もしかしたら、稚拙な(?)論理の人たちであっても真剣さは変わらないのだ、という気持ちだったのか、それを引き受けながら、外教・邪偽の異執として教誨しているのであろうか。今回はこれで終わりにしたいと思います。

皆様のご意見に期待をよせて!